

---

# 引きこもり魔王と××したがり大公

春川

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

引きこもり魔王と××したがり大公

### 【Nコード】

N1740R

### 【作者名】

春川

### 【あらすじ】

ある日突然異世界へやってきた引つ込み思案な少女・文夏あやかは、魔王として魔物に歓迎される。しかし、魔物との常識のズレに恐怖した彼女は異世界で引きこもりとなってしまう…。そんな彼女に優しく接する一人の魔物と、文夏のお話です。同設定の一話完結・シリーズものを予定しています。R15や残酷な描写のチェックは、念のため行っておりますが、これから先どう転ぶのかわかりません。はじめに謝罪しておきます。ごめんなさい。すみません。初心者です。

## 登場人物や設定

ほんのりネタバレを含みますが、ご了承くださいませ。

- - 人物 - -

・文夏<あやか>  
現代の日本人少女  
ある日突然異世界に来てしまった  
魔王と呼ばれる存在  
軽い引きこもり

・フェンルート  
異世界に住む魔物  
強面系美形  
”大公”の称号を持つ

- - 設定 - -

・魔物  
魔王国に住む人ではない生き物の総称  
上位種、中位種、下位種に分けられる

・上位種

人間の姿を持ち、言葉を巧みに操る魔物

・魔王国

魔物の住む国

・大公

魔王国において魔王に次ぐ力を持つ者に与えられる称号  
いわゆる魔王国内ナンバーツィー

## 登場人物や設定（後書き）

よろしくお願い致します。

## 文夏とフェンルート

「フェル……？」

か細い声が長い廊下に響く。

五センチほど開けられたドアから、顔を僅かに覗かせたその人影はぐるぐると布を巻きつけており、容貌がはつきりしない。

しかし、女性だということは声の高さでわかる。

「どないしたんや？」

「あ」

女性が声を発してから十秒もたたないうちに、何もない空間から姿を現した暗い金髪の男が優しく女性の頭を撫でる。

いや、人影は女性と呼ぶ年頃ではなく、恐らく少女だ。

フェンルート、フェンと呼ばれた男と並ぶと、人影がひどく小さいことがわかる。

まだ成人を迎えていない年頃なのだろう。

「あの、ね……」

フェンルートの姿を確認した少女は、全身に巻き付けた布をきゅ、と握り、たどたどしく喋りはじめる。

「あの、ねっ、わたし」

「うん、ゆつくりでええんよ。ゆつくりで、な？」

俯く少女をやりわりと腕に迎え入れて、室内に促すフェンルートは優しく、優しく少女に囁く。

訛りのある話し方だが、フェンルートの声はどこまでも優しい。

「ん。……わたし、わたし、明日、ね。明日、おしごと、する……」

優しい声に励まされてか、ようやく言いたい事を言いきった少女はぼすんと軽い音を立ててベッドに倒れ込んだ。

つい先ほどまで少女が潜り込んでいたベッドは、まだほんのりと温かい。

自分の体温の名残を感じて、少女は緊張が解けたかのように小さく息を吐いた。安堵のため息だ。

「そうか。ありがとうな」

布ごしに少女を撫でるフェンルート。

「ん」

「俺も頑張るさかい、一緒にやらせたってな？」

「ん……ありがとう」

「俺がやりたいだけや」

少女は魔王と呼ばれる存在だった。

しかし、元は全く異なる世界、いわゆる異世界に住んでいた、少し引っ込み思案なごく普通の人間だった。

ある日突然何の前触れもなく、こちらの世界にやってきた少女・あやか文夏は、困惑する彼女を余所に上位種と呼ばれる人間の姿を言葉

を巧みに操る魔物たちにひどく歓迎された。

魔物たちにとって魔王とは、存在してくれるだけで有難い特別な存在なのだ。

魔王がいてくれるだけで日々が楽しい。

魔王がいてくれるだけで毎日が幸せ。

まるで魔王に恋するかのように、魔物たちは魔王の存在を求める。見守るだけで良い、幸せになつてくれるだけで良い。まるで淡い、優しい恋をするかのように魔王を想う。想い続ける。

そういう、精神的に作用する、魔物にだけ効く麻薬のような存在が魔王なのだ。

文夏は、そういう存在として迎えられた。

そのため、生命の危機も生活の危機もなかったが、やはりというか、人間であつた文夏と魔物たちの常識は全く異なっていた。

つまり、魔物の”歓迎”の仕方は、人間の文夏には通用しないものだったのだ。

魔物たちの歓迎の仕方とは即ち――

どうぞ食べて下さい、と言わんばかりにテーブルの上に積み重ねられた人間の死体。

どうぞやって下さい、と言わんばかりにベッドに素っ裸で拘束される男女たち。

——である。

そんなテーブルとベッドの間に召喚された文夏は、魔物たちの歓迎の意を一欠片も感ずることなく、悲鳴を上げることでもできずに卒倒した。

それから文夏は、自分に与えられた部屋でひたすら引きこもっている。

恐怖のあまり、部屋から出る事が出来ないのだ。

引きこもりになってしまった文夏に、やさしく懸命に声をかけてくれ、食事を運んでくれ、不自由はないか？と気遣ってくれたのがフェンルートである。

暗い金髪をツンツンと逆立てた、ヤンキーさながらの強面系美形の顔立ちのフェンルートなのだが、口調は穏やかであるし優しさに溢れたその性格に文夏はすっかり安心し、心を許していた。

フェンルートは他の魔物と違う、と思いこんでしまうほどに。

実際のフェンルートは、大公の称号を持つ、優しさとは無縁の魔物の中の魔物だ。

魔王国で大公と言えば、魔王に次ぐ権力の持ち主で魔王国で一番強い者に与えられる称号なのである。

慈悲？ なにそれ食えるの？ を素で行くフェンルートは、串刺しの刑や引きちぎりの刑など、名前からして非道な刑罰を次々と編み出し、日々の暇を潰し、飽きた・詰まらない・ムカついたの一言であっさりと人を殺したし、魔物も同様に殺した。

人からも魔物からも恐れられる、別格の魔物。

世界中で共通する恐怖の代名詞。それが、フェンルートなのだ。

そんな重要な事実をしることもなく、文夏は今日もフェンルートに撫でられまどろむ。

この世界で安全なのは、この部屋の中とフェンルートの傍だけだ、と言わんばかりに。

「仕事なんてせんでもええのに……ま、俺の姫さんは蜂蜜よりも甘いお方やからしゃあないんやけど。きつと仕事せえへんでタダ飯しとるんが落ちつかへんのやろなあ。可愛い姫さんや。あ、馬鹿どもに言うとかなあ」。姫さんの前に顔出すな、って」

ぎゅうぎゅうと文夏に巻き付いた布を緩め、顔にかかる髪の毛をはらってやりながらフェンルートはひとり言を言う。

「姫さんを腕に抱けるんは、俺だけでええ」

他は有象無象、塵芥や。そう呟いて文夏の額に唇を落とすフェンルートは、文夏という麻薬にすっかり侵されきっていた。

「俺の夢をみるんやで？ ……アヤカ」

## 文夏とフェンルート（後書き）

初挑戦です、もの凄いドキドキしています。意味不明でごめんなさい。

## 魔王と仕事（前編）（前書き）

一話完結とか言いながら、ちょっと長くなりすぎてしまったので、『魔王と仕事』は前編・後編に分けます。すみません。それでは前編をどうぞ。

## 魔王と仕事（前編）

ゴクリ。

誰かの唾を飲む音がやけに響いた。

いつにない緊張を孕んだ魔王国、会議室。

普段は各地に散らばっている魔物たち。

その魔物の中の、さまざまな種類の長たる上位種たちが集まり、各地の様子を話し合う定例会議が今日、行われようとしていた。

魔王が現れて以来、争いが激減した今の魔王国に緊張を必要とする議題など無いはずなのだが、フェンルートの一言で緊張を強いられることとなってしまった。

曰く、「魔王さまが下等生物な貴様らにご尊顔を拝する時間をくださった。繊細なお心をお持ちの魔王さまに、心労をおわせるような下種い真似はすんね。したら死ね。むしろしかけた時点で殺す。脳漿ぶちまけて派手に死ね」という脅し以外のなにものでもない一言によって――。

カッン、カッン、カッン……

ゆっくりと歩く音が聞こえる。

軍靴を常日頃が愛用しているフェンルートの足音だと、上位種たちは即座に悟った。

フェンルートがやってくる。それ即ち、愛しい魔王さまの登場である。

心労をおかけしない。心労をおかけしない。心労をおかけしない。

心労をおかけしない。心労をおかけしない。心労をおかけしない。心労をおかけしない。心労をおかけ——以下エンドレス。

冷や汗で背中をぐしょぐしょにしながら、上位種の魔物たちは呪文を心の中で唱えた。もうそれは必至に。

そして、必死のあまり、むん！と眉間にしわをよせる魔物たちによって、会議室は異様な雰囲気が漂った。

が、そんな空気を気にもせず、ドアを勢いよく開けるフェンルート。

「さ、どうぞ」

大きな体躯をかがめて、魔王をエスコートするフェンルートは、すっかり対文夏用の優しい顔になっている。

普段目にするこのない、優しい顔をした恐怖の代名詞フェンルートを見て、上位種たちは吐き気がした。

が、そんなものは次の瞬間に霧散する。

文夏の、魔王の姿を目にしたからだ。

「お、じゃま、します……」

ズラリと並んだ魔物たちを見て、自然とか細い声になってしまった文夏が、声を発した。

今日の文夏は魔王の仕事として、会議に参加することを自分で決めただけあって、普段全身に巻きつけている布を手放していて、その容貌がはっきりとわかる。

フェンルートが用意した可愛らしい黒色と濃鼠が基調のワンピース

スを纏った文夏は、百十センチ台の身長で、体はどこもかしこも細い。

手首なんかは、フェンリートが握るだけで折れてしまいそうなほど細く、そんな細い体を包む肌は日光をあまり浴びていないせいかひどく白い。

美少女というには、些か難しいシンプルな顔立ちであつたが、華がないだけで、その容貌はきちんと整っていることがわかる。

が、しかし。

魔物たちにとっては外見など二次。

一歩間違えれば病人なのかと疑ってしまうような体躯も、美形ぞろいの上位種たちにとってみればシンプルすぎる顔立ちも、全てが二次である。

無論、普段隠されている文夏の容貌を目に収める事が出来るのは嬉しいのだが、それよりも文夏が自分たちの前に姿を現してくれたという事実が嬉しい。

それだけで、幸せなのである。

「……お待ちしておりました」「……」

「っ！」

感動と喜びを胸に、一斉に立ちあがり頭を下げる魔物たちにビクつく文夏。

……やはり魔物たちの気持ちは伝わっていないようだ。

「姫さん、あっち座るか？姫さんの椅子、俺が用意させてもらてん。気に入ってくれるとええな」

「あ、うん」

硬直しかける文夏に優しく声をかけるフェンルートは、自らの魔力を結晶化させた石のような物質を削り、作り上げた美しい椅子を指し示した。

文夏は、いつも通りの優しいフェンルートに安心して、ふにやりと微笑む。

「ありがとう……」

ここ数日で、ありがとうという言葉に嬉しがるフェンルートに気がついた文夏は素直に礼を述べる。

「こっちこそありがとかな。さ、会議なんてはよ終わらせて部屋帰って、お茶しよ?」

文夏の微笑みに内心悶えながらも、それを表に出さないフェンルート。大人である。

そして、やわらかいクッションを敷き詰めた、ふわふわの椅子に文夏が腰を据えて、ようやく会議がはじまった。

「……でありまして、以後争いは見られません」

「ええことやね、姫さん」

「うん」

「ほな、次、誰かなんぞある？」

「はい…些細なことです、一応ご報告させて頂きます」

「はい、どうぞ」

一応、一番の権力者である魔王として、文夏が続きを促す。  
合いの手を入れる程度だが、これくらいが彼女の精一杯である。  
それでも頑張っているほうなのだ。

「はっ！」

文夏に促され、気合いの入った返事をする上位種。

「私の一族は人間の国との国境付近に住んでいるのですが、どうも近頃人間の様子がおかしいのです。なんでも過去の遺跡や神殿をしらみつぶしに調査し、何かを探しているようなのです。中位種の報告によれば、なにやら界越えの魔方阵を探しているらしく……もしかすると”何やら”を召喚する気なのかもしれません」

「界越えなあ…」

「かいこえ??」

難しそうな顔をするフェンルートの顔を覗き込む文夏。  
その顔は疑問に満ちている。

「あ、姫さんは界越え知らん？」

「うん」

「あんなあ、姫さんも界越えしてきたんよ。こっちに」

「！じゃ、じゃあ」

「せや……界越えつてのは、別の世界の住人を招く魔法のこと。それには特殊な魔方阵がいるねん。俺ら魔物は、魔王を招くために界越えの魔方阵を大事に保管してるんやけど、人間らはあんまり大事にしてへんし、何時の間にか紛失してもうたんやろ。せやから探してる、つちゅーことやな」

「誰か、よぶつもりなの、かな？」

「そうなんかもなあ……ま、今はどうすることもないやろ。ってことで今日の会議はおしまい。次は来月くらいやな。ほんなら、姫さん終わりの言葉をもろてもええですか？」

「え？え？え？」

「おわります、とかで十分やさかい、お願いします」

行き成りの展開についていけない文夏の耳元で囁き、促すフエント。

甘い声で囁きながら、心話で冷たく他の上位種に語りかける。

『明日、同じ時間にこの部屋に来い』

『『『『『はっ…』』』』』

「じゃ、じゃあ、おわります」

「「「「「ご足労頂き、ありがとうございました」「」「」」

「は、はい」

「ほんなら帰りましょか」

ひょいっと文夏を抱きかかえ、歩き出すフェンルート。

「フェ、フェン！ 下りるよ、歩けるもんっ」

「んー？ 聞こえへんなあ？」

「フェン！！」

なんだか甘い空気をばらまきながら、部屋を出て行く二人を認め、  
ようやく上位種たちは全身から力を抜いたのだった。

魔王の退室、それ即ち会議終了の合図である。

本日の会議は、文夏の退室をもって正式に終わったのだった。

## 魔王と仕事（前編）（後書き）

終わりっぽいですが、一応後編がございます。すみません。

後日、文夏の身長を変更しました。

## 魔王と仕事（後編）

「つ、つかれた……！」

「なんでか胃が痛い……っ」

「でも魔王さま可愛かった」

「良い匂いしてた」

「おい、めったなことを言うものではない。大公に聞かれたらどうする」

「あ、いっけね！！ 大公サマめっちゃ怖いもんな」

「ていうか大公デレデレだったな……」

「ああ、それは、なあ？」

「あははは……」

文夏とフェンルートが退室するなり、思い思いに喋り出す上位種の魔物たち。

彼ら同士は、同格のため気安い会話を楽しむのが常なのだ。

「昨日の件だ」

ドガッ！！　と行儀悪くテーブルに足を乗せたフェンルート大公は、懷から取り出した煙管に火を入れた。

「人間どもですな」

フー……と煙を吐き出しながら、上位種の言葉に頷く。

「どこから漏れたかしらんが、魔王さまがこちらに来て下さったことを知ったのだろ。そして、恐れ多くも魔王さまを害そうなどと考え、神子とやらを召喚する気、といったところか」

文夏の前以外では、訛った喋りをしないフェンルートは標準語で、人間たちの考えを想像した。

遙か昔から、人間は魔物を恐れてきた。

外見が違う。

魔力が強い。

種族として強い。

理由をあげればキリがないだろうが、魔物を恐れ、そして魔物の王たる魔王を恐れた。

そして、その恐怖に、存在に、立ち向かうために神子と呼ばれる存在の召喚法を編み出した。いや、魔物が使う魔方阵を模倣した。

界越えの魔方阵がそれである。

魔物たちが用いる陣では、魔王たる人物を招くのに対し、人間たちの陣は魔物・魔王を倒すために強い人物を招いた。

強い人物を招くという、人間たちの陣はひどくアバウトなものだった。

ゆえに性格の破綻した神子やら、血生臭い神子やら、とても神子の名に相応しいとはいえない神子ばかりが召喚されてきた。

そういう記録を事細かにしてきた魔物たちにとっては、人間たちの行方界越えは煩わしい事項の一つであった。

「またわけのわからん神子とやらが召喚されるのでしょうか？」

「だろうよ」

「人間どもが界越えの魔方陣を使つた際に、我々魔物は手を煩わされる……面倒なことですな」

「どうしますか？大公殿」

「魔王さまに仇なすようであれば殺す。国境を越えぬうちには好きにさせておいても問題ないだろう。今の魔王さまはひどく繊細なのだ。こちらから争いを起こすような真似はせん」

すう……つと目を細めたフェンルートは、手に持った煙管を揺らしながら歌うように繰り返した。

「魔王さまに仇なすようであれば、殺す」

「……はっ！！」「」「」

「神子のこと、人間のこと、なんら一切魔王さまに知らせるな。ご自身が狙われているなどと知ってしまえば、心労のあまり倒れてしまつやもしれん。くれぐれも不穏な事は口に出すな」

「かしこまりました」

「魔王さまの平穩こそ、我ら魔物の喜び」

「決して神子のこと、人間のこと喋りますまい」

「魔王さまには心健やかに過ごして頂きたいものです」

「親愛なる我らの魔王さまのために」

上位種たちが次々と言葉を放つ。

そのどれもが魔王、文夏のことを慮っているものであった。

「その言葉しかと聞いたぞ。……魔王さまが呼んでおられる。解散だ」

ふと、虚空を見上げたフェンルートは音もなく、その場からかき消えた。

愛しい愛しい文夏の元へいったのだろう。

## 魔王と仕事（後編）（後書き）

どこで区切れば良いのか悩んだ挙句、変な所で区切ってしまいました…。

主人公が主人公っぽくなくてすみません。全然喋らないですね、文夏…。すみません。

## 策略とお茶

「うー」

久しぶりに部屋から出た文夏は、部屋に戻るなり軽く唸り、着ていた可愛らしワンピースを脱ぎすて、愛用しているシンプルな寝巻に着替え出した。

ばいばいと服を脱いで行く文夏に、着替えをフェンルートに見られている、という羞恥心はない。

幼さゆえである。

何の気負いもなく、素肌を晒していく文夏をきちんと目で追いかけるながらも、フェンルートは平静を装って文夏が脱ぎ捨てたワンピースを拾い上げる。

「はうう……ここが一番落ち着く……」

着替え終え、もそもそと布を全身に巻き付けた文夏は、ちまちまと動きながらベッドにもぐりこみ、体を落ち着け、大きく息を吐き出した。

ここが安心する、と。

「やっぱりまだちょーつと魔物は怖い？」

ベッドの傍の椅子に腰かけたフェンルートが問う。

「うん……あのね、でも、嫌だ〜って言う怖さじゃないの。わたしが、ダメダメだから、そう思っちゃうだけ、で、ね。みんなが嫌いってことじゃ、ない、の……」

シートの上で指先を躍らせながら文夏が答える。

確かに文夏は、はじめ、魔物が怖かった。

見た事もない髪の色をしていたし、瞳の色だって変わった色だった。

それに文夏よりずっと大きくて、怖いくらいにかっこよくて、きれいで、かわいかった。

テレビに出ていた誰よりもずっとずっと。

見た事もない美しさは、文夏にとっては十分恐怖になりえたのだ。さらに歓迎の印として、沢山の人間の死体や、奴隷を差し出されてしまった。

そんなものを目にしたことのない文夏にとっては、もの凄く恐怖だったし、気持ち悪かったし、理解できなかった。

こんなものを貰っても嬉しくないよ、と。

魔物という生き物が理解できなくて、怖くて、怖くて、逃げ出してしまったかった。

お母さんとお父さんに会いたかったし、お気に入りのぬいぐるみに埋もれて眠りたかった。

ここには友達も家族も何も無かった。

文夏は、わんわん泣いた。

泣いて、泣いて、泣いて、泣いた。

触り心地のいいシーツを涙と鼻水でぐしゅぐしゅにしながら、これでもかと泣いた。

そんな文夏に色々と教えてくれたフェンルート。  
あれでも一生懸命考えた歓迎方法なんやねん、と。  
みんなみんな文夏のこと大好きやねん、と。  
ずっとずっと長い事文夏のことを待っててん、と。  
勝手に違う世界に來させてしもてごめんなあ、と。  
せやけど文夏のこと大好きやから帰せへんねん、と。  
怒ってくれてええからご飯を食べたって、と。  
どついてくれてええから嫌いにならんとって、と。

たくさんたくさんフェンルートは文夏に語りかけた。  
文夏のために、親しみやすいと俗にいわれる方言を密かに習得して。  
はじめての優しさを文夏に注いだ。

ベッドにへばりついたままだった文夏だが、懸命に語りかけてくるフェンルートを無碍にできるような性格ではなかったため、いつしかぼつりぼつりと返事を返すようになり、やがてそれが会話になり、そしてベッドから出て、同じテーブルに座ってお茶が出来る仲にまでなった。

それでも、心に植えつけられたとてつもない恐怖が消えることはなく、以前フェンルート以外の魔物に対しては委縮してしまっていた。

「ええねん。全然かまへん。姫さん、俺のことは怖くないやろ？」

「フェンは怖くないよ！」

「うん。ありがとお。それで十分や」

「ほんと…?」

「うん」

につこりと笑うフェンルート。

自分だけ、という愉悦を覚えている事はさとらせない、きれいな笑みだ。

俺だけに笑って。

俺だけを見て。

俺だけと喋って。

俺だけをすきになつて。

そんな想いを全部全部隠して、今日もフェンルートは文夏を成長させない。

フェンルートは決して、他の魔物と文夏との交流を図ったりしない。

彼は文夏が他の魔物の仲良くなることが許せないのだ。

だから、彼は文夏に魔物の名前を教えないし、他の魔物が文夏に会いたがっていることも教えない。

文夏を全部自分のものにしたいのだ。

文夏の中にいる魔物は自分ただ一人で良い。

純粹で単純で、けれど重たい気持ち。

「今のままで十分やで」

その言葉に潜む真意に、文夏はやっぱり気付かない。

「なあ、ベッドでみのむしになるんもええけど、俺とお茶せえへん？」

「……ケーキある？」

「勿論。いちごのショートケーキ、やろ？」

「食べるっ！」

「そうか、ちょっと待ったってな。用意するからな」

「うん！ あかね、わたし、フェンとお茶するのが大好き！」

「俺も、大好きやで」

「一緒だね！」

「せやなあ」

「あ、あとねフェンとお喋りするのも好きだよ！ ここではね、フェンが一番なの！」

「最高に嬉しいわ。ありがとお、愛しいお姫様」

ちゅっ と頬に軽いキス。

「ひゃっ」

驚いて肩をすくめる文夏。

地球でいう外国人顔であるフェンルートがやるからこそ、文夏はそれに疑問を持たない。驚くだけ。

「ほんまに大好きやで」

好き。

それはlike? それともlove?

## 策略とお茶（後書き）

今更？かもしれませんが、フェンルートの関西弁は勘で書いています。

こんなの関西弁じゃないよ、ってのが混ざっているかもしれません。すみません。

## 勉強とおとぎ話（前書き）

半分以上がおとぎ話です…すみません。

## 勉強とおとぎ話

魔王国で一番美しく大きな城、王城の一室に文夏の部屋はある。

王の寝室たるその部屋で、軽い引きこもり状態となっている文夏は、普段室内でどう過ごしているのだろうか。

地球の引きこもりは、恐らくゲームやパソコンをして日々を消化しているのだろうが、あいにくこの世界にそんな気の利いたものは存在しない。

また、存在していても、文夏の幼さでは十分に扱えなかっただろう。

では、そんな文夏が日々何をしているか、と言えば……――

「ほんなら次はいちごって書いてみて？」

「うん！ い、ち、ご……？」

「うーん。おいしいなあ。これやといちごやで」

「え？ え？ あ、ほんとだ！」

日本語に対応させた異世界語一覧表と自分の書いた文字とを見比べる文夏は、紙とペンで必死にお勉強中。

文夏はこちらの世界にきてまだ二カ月程度。

当然、こちらの文字も常識も、何も知らないのである。

そんなこんなで、フェンルート先生の指導のもと、毎日自室でお勉強に励んでいるのであった。

「もかつい、いちごって書いてみましょか？」

「ん！」

いーちーご、と口に出しながら一字一字丁寧に書いていく文夏。  
今度は正しく書けたようだ。

フェンルートをむかって笑顔を向けている。

笑みを向けられているフェンルートもひどく嬉しそうである。

幼い魔王・文夏に変わり、国内ナンバーツーとして国を統治している彼は、本来文夏の先生をしている暇などないはずなのだが、そこは彼が彼たるゆえん。

文夏に関わるのが第一、他に優先することなどありはしないと  
考え、それを実行しているのだ。

有体にいつてしまえば執務の放棄という、些か情けなくもある暴  
拳に出ているにすぎないのだが……。

「正解！　ほんなら絵本を一冊音読してもらおかな？　それで  
今日の勉強はおしまいな」

「はい。今日は何を読めばいい？」

「『魔王さま』」

「あ、わたしこれ好き！」

「そうなん？　なんで？」

「だってこれに出てくるお姫様幸せそうだもん！」

「姫さんは幸せ？」

「ん？ 幸せだよ？」

「そっかあ」

まともに喋れる相手はフェンルートだけ。

まともに顔を合わせられる相手はフェンルートだけ。

親も友達もみんな、人間は誰もいない。

そんな状況で、幸せだと言う文夏に、フェンルートの笑みはとろけるようなものになる。

文夏の言っていることはつまり、フェンルートがいれば幸せ、だということと同義だからである。

現状でいい。そういうことだろう？ フェンルートの笑みが深まる。

「うん！ どうかした……？」

「んーん。それならええねん。さ、音読どうぞ」

「はいっフェン先生」

蜜がしたたるような甘さでフェンルートが文夏を促した。

むかしむかしのことです。

ずっとずっと遠いところからやってきた、美しいお姫様は森の中でひとりの魔物と出会います。

「お姫様、どうしてこんな森へ？」

魔物が問いかけます。

「わからないの。気がいたらここにいたの」

お姫様は不安そうです。

それもそのはずです。

お姫様の向かいにたつ魔物は、それはそれは怖い姿をしていたのです。

魔物は、長く鋭い爪に太く尖った牙、見たこともないような立派な角を持っていたのです。

こんな怖い生き物を見たことがなかったお姫様は、今すぐにでも逃げ出したかったのですが、ここは見知らぬ土地です。

どこへ逃げたらよいのかもわかりません。

悩んだお姫様は、魔物にお願いをすることにします。

「そんな怖い姿ではなくて、もっと優しくそうで素敵な人の姿にはなっってはくれませんか？」

「それがお姫様ののぞみならば」

魔物はすぐさまお姫様のお願いを叶えてくれました。

魔物は光り輝きながら、みるみるうちに人になっていったのです。

お姫様が十を数えるころには、魔物は爪も牙も角も持っていないで  
んでした。

そこにいたのは、王子様のように美しく格好いい人です。

「まあ、なんて素敵なのかしら」

お姫様は驚きます。

「お姫様の願い事は全て叶えてみせます。どうか私と一緒にこの  
森でくらはくれませんか？」

魔物は一生懸命お姫様をお願いします。

そうです。

魔物はお姫様に一目ぼれしてしまっていたのです。

可愛らしく、それでいて美しいお姫様に、好かれなくて仕方なか  
ったのです。

お姫様が森には住めません。と困ったように言えば、あつという  
間に城を築きあげました。

お姫様が私は何も持っていないただのちっぽけな人間です。と困ったように言えば、あっという間にお金も服も宝石も、なんにもかも持っていました。

魔物はお姫様と一緒にいたかったので、とてもとても頑張りました。

魔物といえども、外見はすっかり王子様です。

素敵な王子様の頑張る姿を見て、嫌なお姫様がいるでしょうか。

素敵な王子様に尽くされて、嫌なお姫様がいるでしょうか。

次第に王子様な魔物のことを好きになっていったお姫様は、やがて魔物にあなたのことが好きです、と伝えました。

魔物は大喜びしました。

喜びすぎたあまりお姫様に口づけをしてしまうほどに、喜びました。

そして魔物は、お姫様にその喜びを伝えるために、国を作り、その国の王位をお姫様に贈りました。

お姫様は王様になったのです。

ただしくは魔物の王様なので、魔王様になったのですが、王様は王様です。

魔王様はその後も王子様みたいな魔物と仲良く暮らしました。

魔王様の治める魔王国は、みんなが笑ってすごすとてもすばらしい国になっていきました。

「おしまい」

「はい、よう出来ました」

つかえたり、間違えたりしながらも、最後まで読みあげた文夏をフェンルートは抱き上げた。

「偉い子にはぎゅーってしたらなな」

というのが建前だが、本音はただフェンルートが文夏を抱きしめたいだけ。

「わたし偉い？」

「偉いよお」

「えへへへ……わたしね、やっぱりこれ好き」

「お姫様が幸せやから？」

「うん！ だってお姫様は迷子になったけど、優しい王子様に助けてもらえるし、ちゅー、も、してもらえるし、……とにかく迷子なのに幸せだからすごい！」

幼さ溢れる不思議なお子様理論を展開する文夏。

「わたしもね、迷子みたいだけど、フェンがいるし、わたし……お姫様似てる気がする」

「俺、王子様っぽくないけど、こんな俺でええ？ それともやっぱり王子様のほうがええ？」

「フェンはっ！ 王子様じゃないけどっ、わたしは、フェンがいっっ！」

わざとらしく悲しげな表情をつくってみせたフェンルートに慌てる純真な文夏は、必死になって言葉をつむぐ。

「ほんま？」

自分の服をぎゅうつと握りしめる文夏に、内心で歓喜しつつも、不安そうに問いかけるフェンルート。

「ほんとー！」

そんなフェンルートに真面目に返す文夏。

「良かったあ……王子様やないとダメって言われたらどうしようかと思っただで……」

「わたし、王子様よりフェンがいいもん……」

「ありがとお……俺の姫さんは嬉しいこと言ってくれるなあ」

魔王国に古くから伝わる『魔王さま』という題のお話。

『魔王さま』はおとぎ話のような内容だが、古今東西どの国でも、おとぎ話や昔話というのは意外な意味をもつものが多い。

何気ない話が実は教訓を述べていたり、幸せな話がとんでもなく残酷な話であったり、ありえないような話が歴史では語られない真実を含んでいたり……。

はてさて魔王国に伝わる『魔王さま』。

これは一体……？

とにかくにも、文夏が答えを知る日はまだまだ先のようである。

## 勉強とおとぎ話（後書き）

おとぎ話の中身ばかりですみません。  
というか会話少なくてすみません！

同日、誤字訂正

## 能力とオムライス（前書き）

説明ばかりです…こんなはずでは…。

## 能力とオムライス

魔王がいるだけでふにやふにやになってしまふ魔物たち。

どんな強面な魔物も、どんな凶暴な魔物も、魔王の前ではついついふにやんとした笑顔になってしまう。それが魔王。

だが、それが引きこもり魔王・文夏にも……、魔物の前に姿を現さない文夏にもきちんと適応されているのはなぜか。

答えは至って簡単。

魔物たちは全て、上位種も下位種も何も関係なく、全てが等しく”魔王様察知能力”をもっているからである。

さて、”魔王様察知能力”だが、これは簡単に言ってしまうえばストーリーカー能力である。それもスペシャリスト級のストーリーカー能力。身も蓋もない言いようだが、それでもオブラートに包んでいるのだ。実際はもつとひどい。

まず、魔王さまの誕生を察知できる。

……もうこの時点で、ストーリーカーの域を超えていて気持ち悪いのだが、魔物たちに言わせると分からないほうがおかしい！ というのである。王と戴くお方の誕生を祝えないようでは家臣としてなっていない、だとか。

次に魔王さまがどこにいるのかが分かる。

魔王からして見れば、常に発信機をつけられ監視されているようなもので、ものすごく気持ち悪いのだが、まあ、これも魔物たちからしてみれば当然のことらしい。王の居所もわからぬ家臣などおつても意味がないではないとかウンタラカンタラ。

さらに魔王の感情を読み取れる。

……気持ち悪いを通り越してキモイの一言で切って捨ててしまいたいくらいに、気持ち悪い。が、これも魔物たちにとっては大事な能力。王の気持ちもくみ取れぬ家臣など存在しなくて良いとかナント力。

魔物としての位によって、感じ方は変わるが、大体こんな感じだろう。魔王様察知能力の内訳は。

見事なまでに変態的ではないだろうか。

こんな能力が全ての魔物にあるなどと知れば、人間でも魔王に同情しただろう。

しかし、まあ、こんな感じで魔物たちは文夏の誕生を知り、文夏の居場所を知り、文夏の感情の機微を知っているのだった。

つまり、文夏がひきこもっていても、文夏が今楽しんでいるな、今喜んでいるな、今寂しがっているな、というのは全ての魔物の知る所であるのだ。

だから魔物たちは、文夏の姿を見ることがなくても心穏やかに過ごせる、ということだ。

「あ、魔王さま今お食事中だな」

一人の魔物が呟いた。

途端に周囲にいた魔物たちも、聞き耳をたてるかのように軽く目を閉じ、魔王の気配を探り出す。

「だな。美味しい美味しいって喜んでおられるな」

「大公殿への感謝の気持ちでいっぱいだな……」

「可愛らしいお方だよなあ」

次々と声が上がる。

どの魔物も笑顔だ。

「今日も幸せそうだな！」

「ああ、良い事だ……！」

「魔王さまの幸せを感じるだけで、空の色まで違って見えてくるぜ」

空を仰いだ一人も魔物が、そう口にすると笑いがドッと沸き起った。

「何詩人みたいな事いつてんだよ」

「うるせえ！ 笑うんじゃねえよ！」

「魔王さまに詩の贈りものでもする気か？」

「ニヤニヤすんなっ！」

バシッと笑う魔物を叩く、詩人な魔物。

けれども、その顔は笑顔で、本気で怒っているわけではないことがわかる。

魔王がこちらにやってくる前は、こんな些細なことでも魔力を爆発させ、炎や氷を操り全力で争ったものだが、今では笑い事でおさ

まる。

「でも実際、魔王さまの居場所や感情がわかると安心するし、今まで見過ごしてた些細なものも綺麗に見えてくるんだよねあ……」

「ああ、言われてみればそうかもなあ……。心にゆとりがあるからかな」

ぼつりぼつりと出る言葉。

魔物たちは、そつと何か大事なものを想うように目を細めた。

「あのね、オムライスって知ってる？」

「オムライス？」

文夏がシチューを口にしながら、フェンルートに尋ねた。

「うん、あのね、卵料理なの」

「そのシチューみたいに、姫さんの世界の食べもんなん？」

「えつとねえ、こつちにはないのかな？ 名前が違っただけかもしれないけど、んぐ、焼いたご飯を卵でくるんでケチャップかけて食べるの、んくっ」

喋りながらも文夏の手を止まらない。

フェンルート特製シチューが気に入ったらしい。

「そつかぁ……また調べて作ってみるなぁ」

「うん！ 楽しみにしてるね！」

文夏の記憶をもとに作られる食事。

しかし、幼い文夏に正しい作り方がわかるはずもなく、曖昧な言葉で語られる食事をつくるのはとても難しいことである。

そもそも文夏のいう食材が、こちらの世界には存在しないことすらままにある。

そういう状況下で、どうしてフェンルートが文夏の期待に答え続けていられるのかと言うと……やはりそれは文夏の笑顔を、幸せを感じたいからであろう。

「卵って何の卵なんや……！　そもそも米を卵でくるんだだけで美味しいんか？　味は何味や？　ケチャップをかけるってケチャップってなんなん？」

恐怖の代名詞フェンルート大公が、お子様の愛する黄色い魅惑の食事・オムライスのことですらこんなにも悩んでいるという事を知らない文夏は、今日もぐっすり幸せな夢を見ている。

## 能力とオムライス（後書き）

主役二人の存在の薄さが半端じゃない…！

魔王様察知能力の、居場所察知と感情察知は同じ世界にいないと使えません。

このお話で幼少期という名の、設定話は終わる予定です。

次からは、思春期という名の、私が書きたかった部分を書いていく予定です。

面倒ですみません。よろしくお願い致しますorz

## 素直と不器用（前書き）

文夏が成長しました。

## 素直と不器用

「あー……できないいい」

なんでー？と髪の毛をぐちゃぐちゃとかき混ぜる文夏。

伸ばしている黒髪は腰あたりまで伸びていて、日々のお手入れの成果もあつてか、かなりさらさらで美しい。

そんな髪の毛を、ただ流しているだけではつまらない、と文夏は髪の毛を綺麗にセットすることを思いついたのだが……これが全くもって出来ない。

「頭の上のほうでまとめて、お団子にするだけでしょー？　なん出来ないかなあ」

どっしりとした、けれど美しい鏡台に向ってブツブツ文句をいう文夏。

成長と共に、些か愚痴っぽくなったようだ。

「あー、もう止めよ……てか、なんか髪の毛ぐちゃぐちゃ……」

頬を膨らませ、櫛を手にとった文夏はもくもくと髪の毛を梳かしはじめた。

魔王・文夏。十六歳。

百十台だったところから、身長も伸び、近頃は体つきも女性らしくなってきたが、依然引きこもりのままである。

そんな彼女が最近夢中になっていることは、所謂自分磨き。

爪の形を綺麗に整えてみたり、髪の毛を綺麗にとかしてみたり、姿勢を綺麗にしてみたり、お肌の調子を気にしてみたり……。

小さな努力だが、一人でこっそり出来るのはこれくらいしかないのである。

なにしろ、何年もこの城にいるくせに文夏がまともに口を聞ける相手は、フェンルートただ一人。

よって、何か自分を磨くのに必要な物——たとえば爪を彩るマニキュアだとか、髪をセットするのに必要な整髪剤だとか——を手に入れるには、フェンルートに頼るしかないのだ。

しかし、お年頃な文夏はそれを嫌がった。

驚くほど格好良くて、きれいで、なのに意地悪で、口が悪くて、文夏のことをからかうフェンルートを、頼るのが嫌だったのだ。

感情の出所は羞恥心かもしれない。

とにかく、文夏は、フェンルートを頼らなかった。

そして……今日は髪型を変えてみよう！　と思い立ったのが、無理だった。というわけである。

「あーあ。やっぱり不器用なのかな、わたし」

いつも通り、すっと落ちるように流れるまっすぐな黒髪を見て溜め息。

別にこの髪型が嫌なわけではない。

むしろ気に入っている。

でも、髪型を変えてみたかった。

上手くできない自分に、もう一つ溜め息をついて櫛を放り投げた文夏は、大好きなベッドにあおむけに倒れ込んだ。

そんな文夏に覆いかぶさるように人影がどこからともなく現れる。

「なにが無理なん？」

「フェン……」

によきつという音が似合いそうなほど、どこからともなく現れたフェンルート。

そんな彼にちつとも驚かない文夏は、もうすっかり彼に慣れてしまっているのだろう。

「なにニヤニヤしてんのよ」

驚くよりも先に、意地悪そうな笑みをむけるフェンルートに何か言ってやりたかっただけかもしれないが。

「いやあ？ 姫さんが何してたんか気になっただけやで？」

「……嘘付き」

「なにが？」

つんつんと逆立てられている、短めの暗い金髪が明かりを遮り、文夏の顔に影を落とす。

「だって、タイミングがわざとらしい」

「ん？」

「笑顔も胡散臭い。ムカつく。……昔は優しかったのに」

最後にぼそつと呟いて、文夏は体を転がし、うつ伏せになった。

脳裏に浮かぶのは、意地悪な笑みを浮かべたフェンルートではなく、優しい笑みを浮かべたフェンルートだ。時々思い出したように文夏の部屋を訪れるフェンルートではなく、ずっと一緒にいてくれたフェンルート。

「昔は、優しかったのに……」

すん、と小さく鼻を鳴らした。

「……はあ」

文夏がシートに顔を埋めて、フェンルートの様子をうかがっていると、フェンルートが溜め息をついて、ベッドから離れて行くのがわかった。

文夏の胸が痛んだ。

大きくなったわたしなんて、どうでもいいんだ！　ロリコンフェンルート of 馬鹿！

心中で悪態をつく文夏。

そんな彼女をよそになにやら室内をごそごそ探っているフェンルート。

「姫さんは素直やなくなっただなあ」

いつからか文夏の前でも吹かすようになった煙管の香りが、文夏の鼻を突いた。

ほんのり甘いような、甘くないような、不思議な香りを漂わせな

がら、フェンルーツが文夏の右手を掴む。

文夏は彼のなすがままだ。  
顔を上げない。

「赤、ピンク、青、黒、黄。どれがええ？」

「……意味わかんない」

「ええからはよ」

「……紫」

「人の話きいてへんの？」

「じゃあ赤」

「何拗ねとるん」

「すねてない」

「嘘や」

「嘘じゃない」

「お子様やなあ」

「っお子様じゃない！！ 離して！」

お子様という言葉に反応した文夏がフェンルーツの手を振り払う。  
ベッドから起き上がった文夏は、不機嫌そうにフェンルーツに睨

みつけるが、フェンルーツは意地悪そうな笑みを崩さない。

「お子様やないんやったら、大人しゅう手え貸し」

赤色のマニキュアを揺らしながらフェンルーツが言う。

「それ……」

「お子様には早いかもしれんけど、お子様やないんやったら丁度ええかもな」

ポンつと簡単に魔力を固めサイドテーブルを作りだしたフェンルーツが、エタノールやベースコート・トップコートやらをそれに並べはじめ。

「……」

驚いて言葉もでない文夏はそれらを眺めるままだ。

「ほら、手え貸し」

茫然とする文夏をよそに、笑いながら彼女の手を取り、エタノールを含ませたコットンで爪を磨いていくフェンルーツ。

その様子は手慣れていることをうかがわせた。

「なんで……わかったの？」

「なにが？」

なんでやってみたかった事を知っているのかと尋ねる文夏を、さ

らりと流すフェンルート。

エタノールで爪を磨きあげ、ベースコートを塗り始める。  
迷いのない筆運びで、さらりさらりと爪をなぞる。

「わたしが、これしかたつたって」

「……これな、鏡台の下の引き出しに入ってるねん」

「え？」

「去年くらいの誕生祝いの一部」

「うそ」

「嘘やないよ」

ベースコートを塗り終え、ポリッシュ…赤いマニキュアを塗り始める。

先ほどとは逆に、嘘か否かを問いあう二人。

「言わんとわからん男とちゃうねんで？ 俺」

言わんでもわかるわ。と暗に言うフェンルートは、事実文夏のことを誰よりも知っている。

「じゃあ、なんで……」

「なんで？」

「じゃあ、なんで、わざわざ言わせようとしたの……?」

「そりゃあ、昔とちごて優しくなくなっただからとちゃう?」

「もう!」

僅かにポリッシユがはみ出してしまった部分をウッドスティックで削り、仕上げにトップコートを塗布する。

憤慨する文夏をよそに、フェンルーツは文夏の爪に息を吹きかける。

「ほら、出来たで」

「……ありがとう」

綺麗に赤く染まった爪を眩しそうに見つめる文夏。  
その頬は薄く色づき、ひどく嬉しそうだ。

「いーえ」

煙管を吹かせるフェンルーツ。

その顔は文夏とは対照的に、少し冷たい。

フェンルーツは文夏を試したのだ。

文夏が自分に、これが欲しい、あれが欲しい、ああして欲しい、こうして欲しい。そう言ってくるのを待っていた。

文夏が生きるにはフェンルーツに頼るしかなく、文夏がどんな場

合にも頼りに出来るのはフェンルートだけであり、文夏が思い浮かべる生き物はフェンルートだけであるべきだと思っている。

フェンルートはそれを求めている。

そうして、今回、試した。

文夏がどれくらい自分に依存しているのかを。

フェンルートは強欲だ。

全部欲しいと願っている。

文夏の全部が。

中途半端ならばいつそいらない。

そして――

五十点。

フェンルートは今回の文夏の態度に対してそう点を付けた。

何かを欲しがっていても部屋を出なかった点は良し。

何かを欲しがっていても他人に求めなかった点は良し。

何かを欲しがっているのにフェンルートに言わなかった点は悪い。

何かを欲しがっているのに一人で思考錯誤した点は悪い。

半分半分。よって、五十点。

頼ればいい。

言えばいい。

欲しがればいい。

呼びつければいい。

わがままだろって、言われるような、それを求めている。

傲岸不遜に命じれば良い。

こうしろ、ああしろ。そう言われたい。

なのに、文夏は言わない。

だからフェンルートは不満なのだ。そしてそれが顔に出た。

フェンルートは文夏の求めているものを知っている。

あれがしたい、これがしたい。

だが、それを察して自分から動くようではだめだと、フェンルートは思っている。

それではただの魔王を敬愛する家臣でしかない。

フェンルートは魔王の忠実な家臣になりたいのではないのだ。

「やっぱちよつと方向性間違えたんかなあ」

ぼそりとフェンルートが呟く。

「ん？ 何か言った？」

「んや？ 言ってるんよ」

「あのね、あのね、爪ありがとう！ でね、ついでと言ってはなんだけど……」

フェンルートを見上げる文夏の目は期待に満ちている。

「ん？」

文夏の言いたいことはわかっている。

髪の毛もいじって欲しいのだろう。

でも、フェンルートからはそれを言わない。  
文夏に言わせたいから。

「……髪の毛もして？」

「うん。ええよ」

良し。

フェンルートは内心で首肯する。

「ほんとにつ！？　なんで？　なんで？　さっきまで意地悪だったのに！」

「んー、何でやと思う？」

「えー…わたしが聞いているのに」

「ふふ。別にわからんでもええやん。さ、髪型はどんなんがええの？」

「んーとね、お団子！」

「てっぺんで丸めるアレでええん？」

「ん！」

「はいよ……ま、俺がつい甘やかしてしもてるんも悪いんやろけど」

「何か言った？」

「いや？」

フェンルートはいつだって文夏を試している。  
文夏の全てを求めるがゆえに。

## 素直と不器用（後書き）

消化不良…。

成長と共に素直じゃなくなった（思春期的な意味で）文夏に、不満たらたらのフェンルートです。

あらゆる事で頼りたいのに、頼ってくれなくて、自主的に手を貸してしまうフェンルート（笑）みたいな…。

けどやっぱり頼りたいねん！みたいな…難しい。迷走してますね。すみません！

あ、書きたかったのは文夏にマニキュアを施すフェンルートですw

## お祝と変化（前書き）

女の子のお祝い事の一つである、思春期に始まるアレが始まる描写があります。無理！と言う方はこのお話をスルーして下さいませ。ぶっちゃけますと、いわゆる生理ネタです…本当にすみません。ご注意くださいませ！

## お祝と変化

どうしよう。

床に座り込む文夏の脳裏では、その言葉だけがぐるぐると回っていた。

文夏、十六歳の終わりごろの事である。

もうずっと前から文夏が引きこもっているこの部屋は、至れり尽くせりな作りをしている。

トイレ、浴室完備。室内庭園有り。キッチン有り。図書館並みの蔵書有り……といったかんじである。

文夏が望めばなんでも、フェンルートが何時の間にか増設しているので、文夏の部屋は、もう部屋という域を超えてしまっている。だからこそ、文夏が引きこもりとして生きていけているわけだが。

そんな至れり尽くせりな部屋のトイレに文夏が行ったときの反応が、「どうしよう」である。

実は二日ほど前から、お腹の調子が良くなかった文夏。

しかし、調子が悪いといってもお腹を壊しているというわけではなく、なんだか感じたことのない不思議な痛みを覚えていただけであった。

勿論、文夏はフェンルートに話した。

「お腹痛いから、痛み止め頂戴」と。

至れり尽くせりな文夏の部屋だが、薬はフェンルートが置くのを嫌がったため、文夏の部屋にはないのだ。薬は毒にもなるから。

痛み止めの使用法を何度も懇切丁寧に説明するフェンルートに、まじめにうんうんと頷き、薬を服用して、ベッドでまどろんでいた文夏。

フェンルートが精製したという痛み止めは、よく効くが、眠気がすさまじい。

こつくりこつくりと頭をゆらゆらさせながら、生命活動の一環としてトイレに行った文夏は――

パンツを濡らす赤いものに絶句した。

「な、に……これ……」

そしてようやく、冒頭にもどる。

文夏は世間を知らない。

フェンルートが教えようとしないうの、というのが正しいのだが、文夏は世間を知らぬが故に、自分の身に起こっていることが理解できなかった。

もし、女性の知り合いがいたならば、“こういう”話をしたかもしれないが、文夏にはそんな気安いい知り合いはいない。

文夏が知っているのはフェンルートだけなのだ。フェンルートがそう望んだがために。

そして、文夏が普段接する本にはこんな事は書かれていなかった。だから、文夏は世間一般でいう生理という現象についてひどく怯えた。

全く自分の知らない現象が、自分の身に起きたから。

「フェン、フェン、フェンッ!!」

怖くて怖くて仕方なくなった文夏は、無意識にフェンルートの名前を呼んでいた。

文夏が頼れる人はフェンルートしかない。

文夏が名前を呼べる人はフェンルートしかない。  
そういうことの現れだった。

「どないしたんー？ トイレでもつまったかー？」

ラバトリのドアの前でフェンルートがふざけた声をあげている。

「フェン！ はやく来てよっ!!」

ふざけたフェンルートに噛みつく余裕もない文夏は、もはや叫んでいる。

「えー？ ラバに入らんとってて前姫さん言ったやん。ええの？」

「いいからはやくっ!!」

「はいはい」

未知のものにたいする焦りと恐怖を隠せない文夏に対し、フェン

ルートは飄々としている。

フェンルートは彼なりに文夏を大切に想っているはずなのに、この落ち着きよう。

文夏は憤りを感じたが、同時に悲しくなった。

なんでそんなに落ち着いてるの、わたしの事なんてどうでもいいの、と。

その答えは勿論NOだし、フェンルートは真実文夏を大切に想っている。

ではなぜ落ち着いているのか。

それは、文夏の部屋に施してある守りがこの世で一番強固であり、敵などの侵入はあり得ないという事と、フェンルートが文夏の身に何が起きているかを”知っている”からである。

「ほんなら開けるでー」

「フェン……っ!」

呑気な声と共にラバトリのドアを開け、床に座り込む文夏を確認したフェンルートは、ドアを開けたことにより、一層香るようになった血の匂いに目を細めた。

「どないした？」

何も知りません、という顔でしゃがみ込むフェンルート。

「血、が……っ!」

そのフェンルートの首にかじりつくようにしがみ付き、震える文夏。

「血が、出でて、知らない、知らないもん！　こんなの、わかんない！　やだ、やだ……も、やだあつ！」

「血、ね」

ゴミ箱に入った血濡れのパンツを視界の端で捉えた彼は、頷き、今パンツ履いてるんやろか、なんて考えた。

「なんで？　なんで？　わたし、気持ち悪い……っ！」

「んー、ちょい落ち着こか」

自分の首にしがみつく文夏を嬉しそうに見下ろしながらも、いつも通りな声を発したフェンルートは、軽々しく文夏を抱き上げ、ラバトリーを出る。

ちなみにフェンルートは抱き上げたとき、文夏がパンツを履いていないことに気付いた。

セクハラをするオヤジのような心境で大股で歩き、向かった先はソファだ。

ソファに腰掛けた自分の膝に文夏を座らせながら、彼女を落ち着かせるために背をさすってやる。

ちなみに文夏の尻の下には、バスタオル大のタオルを敷いた。

「……落ち着いた？」

「ん。……騒いで、ごめん」

「ん。腰とか、腹とか痛いところある？」

「……んーん」

「まずは、おめでとうさん」

「なんで!？」

「はい、落ち着いて。んー、なんて言うのかな。これで姫さんは妊娠できるようになった、てことかな」

「え」

固まる文夏。

流すフェンルート。

「性についての知識は薄いよな、姫さん。本ではどうせ『交わる』とか『一つになる』とかで紛らわしてるんやろし。おっしや、とりあえずーから性交のこととか妊娠のこととか、コレの処理の仕方教えるわ」

そう言いきったフェンルートは、それはそれはいい笑顔をしていた。

「……てなかんじで、ようやく赤ん坊が生まれるねん。わかった？」

「もう、いい……」

真っ赤な顔をしている文夏をみれば、フェンルートが、どんな風に物事を語ったのか想像に難くない。

「そ？　んで、まあ、はじめて月経がきたらおめでとう、言っねん。せやから、おめでとう」

「ウン、アリガトウ」

「んでな、さっき説明した通り大体一週間はコレ続くから、ちゃんと対処してな？」

「う……ん」

大きなフェンルートの手でお腹を撫でられた文夏は、説明された不思議現象がこの腹の中で起こっているのか、と不思議そうな顔で自分の腹を見下ろした。

「じゃ、ハイ」

どこから出したのか、文夏の手に見慣れない物体を置くフェンルート。

「なにこれ？」

「さっき説明した月経時の処理に必要なモン」

「わっ！」

思わず取り落としてしまう文夏。

床に落ちかけた、月経時に処理に必要なモン……ナプキンを宙でキャッチしたのは無論フェンルートだ。

「あぶな。はい、じゃあラバ行つてらっしゃい。ちゃんと着けてくるんやで」

もう一度、改めて文夏の手になプキンを渡したフェンルートは、優しい笑顔で文夏を見送った。

しかし、その優しい笑顔もすぐに崩れた。

文夏が取り乱し、自分の名を必死に呼んだときの高揚感を思い出し唇が凶悪につり上がってしまったのだ。

フェンルートは久々に心底嬉しかった。

あの時の文夏の様子は、彼が彼女に求めているものに近づいていたからだ。

けれど、同時に、まだまだ、とも思った。

もっと、もっと、もっと。もっと求めて欲しい……！

フェンルートの欲求は、満足とは無縁に肥大し続ける。

文夏にもっと多くを求めてしまう。求めずにはいられないのだ。

性別という垣根も羞恥心という垣根も、全ての障害を、何もかもを壊して自分だけを見つめていて欲しい。

恥ずかしいから頼れない？

性別が違うから頼れない？

考え方が違うから頼れない？

元の種族が違うから頼れない？

年齢に差があり過ぎるから頼れない？

フェンルーツは、そんなものを何一つ許さない。

ありとあらゆる場合に置いて、頼られなければ意味がない。  
文夏にとつての唯一であり、不動の一番を勝ち取るにはそれくらいでなければならない。

フェンルーツはそう信じ、己に課している。彼女にいついかなる時にも頼られる存在になることを。

そのためには、文夏とフェンルーツだけの場所が必要だ。  
そう考えているだけに、今の出来事はひどくフェンルーツを喜ばせた。

無意識にフェンルーツの名を呼び、助けを求めたあの時、真実文夏の世界には、文夏とフェンルーツしかいなかったのだ。

「あと、もうひと押し……か」

大公。

魔王国において、魔王に次ぐナンバーツ一の称号を持つフェンルーツという名の魔物はうつそりと微笑んだ。  
それはそれは魔物らしく。

アヤカ。

今まで気付かへんかっただけで、貴女の世界にはもう俺とアヤカの二人しかおらへんのや。

二人だけの世界をつくったなら、キッチンと蓋をせなね。

さあ、そろそろ世界を閉じてしまおう。

余計なものはいらないのだから。

## お祝と変化（後書き）

R15… ですよ。 たぶん。

実はこのネタが書きたくてこのお話をはじめました。

気分が悪くなったという方がおられましたら、本当に申し訳ありません。 すみません。

あと数話で終わる予定です。

## 神子と独占（前編）（前書き）

「神子と独占」には人に対する不快な形容が多々出現します。（ブ  
サイク、脂肪等々）

また、残酷な描写も入る予定です。

くれぐれもご注意くださいませ。本当にすみません。

## 神子と独占（前編）

雲間からわずかに注ぐ月光のもと、人影がするりと室内に忍び込んだ。

いや、忍び込んだと言っても、いつ入って来たのかもわからない。気がつけば、そこに存在していたのだ。

「はっ、馬鹿だな。こんな間違いだらけの魔方陣が作動するわけないだろうが」

口の悪いその侵入者は、床に描かれた魔方陣を冷ややかに見下ろした。

こんなものに価値はないと言わんばかりに。

「ま、今回ばかりは成功を味わわせてやろう」

心底馬鹿にしきつた口調で、そう言いきり、魔方陣に手を加えて行く侵入者。

間違っている箇所を削りとり、訂正し、必要なものを加える。

瞬く間に正しい魔方陣へとなったそれは、先ほどまで描かれていたものとは明らかに違っていた。

キラキラと美しく煌き、月光に照らされる魔方陣は、素晴らしい存在感でもってその場にあった。

しかし、それも侵入者には忌々しいものでしかない。

「……吐き気がするな。みすばらしい模倣品なんぞを描くことに

なるとは……」

眉間にしわをよせ、不本意なものを描いてしまったと苦々しい顔をしている。

それは、侵入者が人間の感じる美しさとは無縁であったせいかもしれないし、そのまま言葉通りの意味で吐き気がしたせいかもしれない。

「帰るか」

首を傾け、ゴキリと音を鳴らした侵入者はまた音もなく闇に消えた。

そしてその場は——神殿は、また無人の場となった。

その日、神聖プリシア帝国はお祭り騒ぎであった。

数年前から試みていた界越えの魔法がついに成功し、神子を呼ぶことに成功したのだ。

魔王が魔王国において召喚されたと判明してからというもの、人間が枕を高くして眠れた日はない、とはとある人間の話であるが、そんな日々ともおさらばだ、ということで人間たちは大騒ぎしているのである。

「神子さま——！」

「神子さまー！ー！」

「神子さまー！ー！ー！」

王宮のテラスに立つ人影に向かって大声をあげる民衆。

その様子は、地球でいえば、コンサート会場で叫ぶ熱狂的なファンさながらだったが、あいにくこちらの世界にはコンサート会場などはないし、芸能人も存在しないので、この面白さは誰にもわからない。

地球から召喚された神子以外は。

「（なにこれーすつー）」

優しく民衆に手を振りながら、思うことは些か神子らしくないが、彼女こそが召喚された神子、レイカであった。

ふわふわとした長い金髪に碧眼。

スタイル抜群でしかも美しい。

神子様と崇めたくなる気持ちも分からなくはないが、この神子、地球ではただの女子高生である。

私立のお馬鹿高校に通う彼女は、漢字で書くと麗華という名前だが、とにかくその字面に負けていたブサイク女子だった。

にきびだらけで、かつパンパンに膨らんだ顔。

眉毛は繋がっていたし、目は脂肪に埋もれてほとんどないも同然。

鼻はぺしゃんこで、唇はガサガサで色黒。

体型も驚くほど大きく、どこかしこも脂肪だらけであった。

一時期は百キロを容易く超える体重であったし、マシだった時期

でも八十キロはあった。

体毛の処理など一度もしたことがなく、どこもかしこもボーボーで、まさにジャングル状態。

そんな名前負け女子が今や、金髪碧眼のウルトラ美少女。

麗華は最高の気持ちだった。

神子さま、神子さまと言われ、大切に扱われ、喋ったこともないほど格好いい男性に好意を向けられる。

天にも昇る気持ちでこういうことなんだわと、こっちの世界に來れたことを喜んでいた。

嫌な思い出しかない地球のことを、麗華は早々と忘れようとしていたのだ。

「神子さま、どうぞこちらへ」

「はい」

美しい青年に声をかけられた麗華は、最後にもう一度群がる民衆に手を振り、青年の後について行った。

ここはなんて素敵な世界なんだろう！　そう思いながら。

「神子さま、お疲れさまでした」

「いいえ」

麗華が控え目に微笑めば、青年はなんてお優しい方なんだと感激した。

この帝国の人間はみなそうだ。

麗華に対し、丁寧で親切で、ちょっとしたことでお優しい、美しい、素晴らしいと誉めたたえる。

麗華はその心地よさに浸っていた。

この環境を維持するために頑張ろう！　と変な気を起こすくらいには。

「さあ、行きましょう！　我々に勝利を！」

……高く手を掲げて号令し、魔王を倒すための旅に出る事に乗り気になるくらいには、変になっていた。

麗華は思いこみの激しい人間だ。

自分はダメな人間だ、と思いこんだ結果が暴飲暴食による激太りであるし、さらに自分はダメな人間だ、と思いこんだ結果が妄想への逃避であるし、もうダメでダメすぎる人間なんだと思いこんだ結果が飛び降り自殺である。

もっとも、飛び降り自殺を図り、マンションの最上階から飛び降りた瞬間にこちらの世界に来ているので、一応飛び降り自殺は未遂のはずだ、というのが麗華の考えである。

とにかく麗華は思いこみの激しい人間なのだ。

そして、今彼女が思いこんでいることは――

「魔王を倒さない限り、平穏は訪れないわ。でも大丈夫。私には神々の守護があるわ。必ず勝てる。世界を救いましょう！」

である。

麗華はついに現実に目を背け、妄想への逃避を行っていた人間だ。故に、虚構の世界と現実の世界の壁がひどく薄いものになっている。

彼女の頭の中では、ファンタジー小説の中では定番になりつつある異世界トリップのこととか、召喚された者の幸福な末路とか、召喚されたものの絶対的な成功とかが駆け巡っていた。

つまり、自分は大丈夫。絶対幸せになれる。成功する。そう、思い込んでいた。

そうして、神子一行は神聖プリシア帝国、帝都を発った。

「あれ？ フェンどっか行ってた？」

「んー？ なんで？」

いつものように前触れなく、ふわりと文夏の部屋に現れたフェンルートに対し、文夏もいつものように動じない。

「……なんとなく、かな？ どっかから帰って来たんだ、ってふと思っただけだし」

「なるほど。結果くらいは認識できるようになったってことか」

「結果？」

「ああ、今ちよつと立て込んでるねん。やから一応、な」

ソファで本を読んでいた文夏は、立て込んでいるだなんて今まで一度も聞いたことのない言葉に対し驚き、顔を上げた。

「なんかあつたの？」

「あー……あつたと言えばあつたようなー」

「何それ曖昧」

ふらつとキッチンの方へ向かい、誤魔化そうとするフェンルートを目で追った文夏は、喋る気ないな、とすぐさま諦めた。

どうせ仕事をさぼっていたツケがまわって来たんだろう、なんて思ったから。

「レモンティーとアールグレイ、どっちがええ？」

「ミルクティー」

「……レモンティーとアールグレイ、どっちがええ？」

「ダーズリン」

「どっちやて聞いてるんやけど」

「わたしはミルクティーかダーズリンが飲みたいんだけど」

「ミルクティーもダーズリンもないで？」

「……じゃあ用意して」

「ははっ！　OK！　姫さんの言つとおりに」

顔も合わせずに言い合いをしていた二人だが、フェンルートの笑い声によつてそれは終わる。

文夏が最後まで自分の意見を突きとおそつとした事が嬉しいのだから。

フェンルートは文夏のワガママを推奨している身だから。

「五分ほど待つてくれへん？」

「三分」

「四分で。ケーキも用意するから」

「いちこのショートケーキ以外はヤダ」

「勿論！　あ、暇つぶしにこれプレゼントするわ。大人しゅう待つとくんやで」

明るい声を上げたフェンルートは意地悪そうに笑い、文夏の頭上に魔法で花を振らせ、読書の妨害をして姿を消した。

頭から花をかぶることになった文夏は苛立たしげにそれらを払いのけ、叫んだ。

「こんなのいらないし！！」

遠くでフェンルートの笑い声が聞こえた気がした。



## 神子と独占（前編）（後書き）

そして続きます…本当にすみません。

気分が悪くなった、という方がおられましたら申し訳ありません。

## 神子と独占（中編）（前書き）

中編です…。前編・後編で終わりませんでした。  
一話完結とか言っておいて、本当にすみません。

## 神子と独占（中編）

「人間どもの進行具合はどうだ？」

「は、まもなく国境付近へ到着いたします」

文夏の部屋から姿を消し、会議室に姿を現したフェンルートはズラリと並ぶ上位種たちに話しかける。

「そうか」

「いかががいたしましょうか。ご命令を頂ければすぐにも殲滅いたしますが」

「前言ったことを覚えてねえのか？ 国境を越えるまでは人間どもの好きにさせておけと言っただろうが」

「はっ」

数年前。

人間が界越えの魔方陣を探している事を察知した際、会議で話し合ったのだ。

魔王さまに仇なすようであれば殺す。が、国境を越えるまでは好きにさせておく。なぜならば、魔王さまが争いを好まないから。

分かりやす過ぎるほどに魔王さま一筋な魔物たちには、魔王が好まない、それだけで争いをしない理由には十分すぎるほどだった。

「国境を越えたらただちに神子以外を殺せ」

「神子以外、ですか」

「神子は俺がやる」

「はっ！　かしこまりました」

喋りながらも、ぼんぼんとティーセットを魔力で作り上げていくフェンルート。

文夏と約束した四分を破る気はさらさらないということだろう。

「じゃ、各自行動」

そう言って、登場したときと同じようにするりと空気に解けるようにフェンルートは姿を消した。

勿論行く先は文夏の部屋。

「ハイ、ダーズリンといちこのショートケーキ」

「ありがとうっ」

待つてました！　と姿を現したフェンルートめがけて帽子の中に集めた花びらを投げつける文夏。

「つぶ」

「あはっ！　仕返し成功！」

姿を現した場所が悪かったのか、フェンルートは顔面に花びらを

迎えてしまった。

「……言うつくけど、姫さんのダージリンもショートケーキも臨終やで」

ほら、と花びらの入った紅茶カップと花びらの乗ったケーキを見せる。

「ええっ!？」

「ええ、って当たり前やろ。ドンマイ」

「ちゃんと守ってよ！ わたしのおやつ!」

ひどい！ と文夏は嘆く。

もし第三者が見ていたなら、どっちもどっちだと思っただろう。

ぶつぶつと小さな言い合いをしながら、いつもと同じようにダラダラと過ごす文夏とフェンルート。

そしてそれは、文夏にとって突然やってきた。

ズシン……と部屋全体、いや、城全体に響くように大きな物音がたつ。

文夏は驚き、ソファから立ち上がる。

「座り」

そんな文夏をソファに座るように促すフェンルート。  
その姿は一瞬で変わっていた。

ツンツンと立たせてある薄暗い金髪の中から角が二本生えているのだ。

喋った時にちらりと覗いた犬歯は驚くほど伸びているし、爪だつて鋭く、まるで武器のようになっている。

部分的に体を魔物のものに戻したのだ。

「フェン……?」

「ん? ああ、これ? かつこええやろ?」

「え、うん」

「やろ?」

「いや、そうじゃなくて」

「ん?」

自分の角やら爪やらを示して笑うフェンルートに思わず同意してしまった文夏だが、違う違う、と首を振り気をとりなおす。

「今の大きな音って何?」

「ああ、そつちのことか。侵入者」

「侵入者?」

「そつ」

二人が話をする間にもズシーンやら、ドシーンやら、バーンやら

と大きな音は鳴りやまない。  
室内もほのかに揺れている。

「恐竜、的な？」

あまりに大きな音にそう尋ねてしまった文夏だが、それはすぐに否定される。

「ちやうよ。人間」

「へ？ 人？」

「そう。人間は俺ら魔物のことが嫌いだから、時々こうやって殺しに来るねん」

「なに、それ……」

予想もしない答えに呆けてしまう文夏。

文夏はこの部屋で大切に大切に……過保護に育てられた。

地球のようにテレビもなくマスメディアも発達していないこの世界では、部屋で大切に育てられてしまうと、現代日本よりも争いに耐性がなくなってしまう。

むせ返る血の香りは勿論、紛争の様子、殺人の様子も何も”知らない”のだ。

争いとは無縁と言われる日本に育っても、日本はマスメディアが発達しているために、ネット上でいくらでもその手のニュースが映像で見ることが出来る。

だがしかし、この文夏の部屋ではそれすらもないのだ。

そんな、真実温室育ちの彼女が、人間が殺しに来ている、と聞かされて果たして平静でいられるだろうか。

答えはNOである。

「わたし、なにかした……？」

「……」

「わたしは魔王だから、だからっ、殺しにくるの！？」

「……」

「なんで違うって言うてくれないの！？ わたし何もしてないのに！」

フェンルートを掴みかかり、シャツの襟を引っ張り、吐露する文夏はもう泣いていた。

感情の制御が出来ていないのだろう。あまりに衝撃的すぎて。

「……泣き顔ぶっさいくやなあ」

くくつと笑って、フェンルートは文夏の涙を指ですくった。

「問題あらへん。姫さんは俺が守ったる」

「フェン……」

「せやから、泣きやめ。ぶっさいくやぞ」

「う、るさいっ」

ひどい言葉とは裏腹に、文夏の頭を撫でる手はひどく優しい。いつもと対して様子の変わらないフェンルートと接していると、自分が取り乱しているのが馬鹿みたいに思えてくる。

文夏は涙をぬぐった。フェンルートの襟から手を離れた。

それでも恐怖心は消えなかったけれど。

フェンルートがいるなら、と思ったのだ。

結局それすら、争いを知らぬ者ゆえの安易な考えなのだが。

バンッ！！

「！」

「見つけた……！」

けれど、初めてこの部屋に入って来た他人を見て、文夏は恐怖が増幅するのをどうする事も出来なかった。

文夏の部屋は文夏とフェンルート以外誰も入ったことがない。だから、安心で安全で、文夏が心安らげる場所であったのだ。怖いものはこの部屋には来ない。そう信じてきた。

なのに、全く見知らぬ人間が、文夏の部屋に入って来たのだ。

自分の一番大事な場所を汚された気がした。

神子と独占（中編）（後書き）

続きます……。すみません。

**神子と独占（後編）（前書き）**

残酷な描写が含まれます。  
ご注意くださいませ。

## 神子と独占（後編）

「あなたが魔王ね。よくもわたしの仲間を……っ！」

金髪碧眼の美しい女性。魔物には負ける美しさだけど。

なんて意見を文夏が持てたのは、随分あとのことで、この時はただただ動揺していただけ。

「わたしはレイカ！ あなたを倒すっ！」

ところどころ傷つき、血を流している麗華。

文夏の部屋に来るまでに戦闘があつたのだろう。

勿論、フェンルートから神子は殺すなという命令が出ていたので、魔物にとっては戦闘というよりちよっかいをかけた程度だろうが。

「フェンっ！」

すぐさまフェンルートの後ろへ隠れる文夏。

魔王の威厳もあつたものじゃないが、ひ弱な文夏が取れる数少ない賢い選択といえた。

しかし、ぱああ……と掌に光の球をつくりあげていく麗華は、文夏の動きなんてどうでもよかった。

麗華の頭にあつたのは、魔王を倒す、仲間の仇をとる、そして国へ帰ってハッピーエンド、だった。

仲間が殺される段階で、魔物の圧倒的な力を見ているはずにも関わらず、魔物に、それも一番強い魔物に勝負を吹っ掛けるその無謀

さは、もはや馬鹿としか言いようがない。

「神の力をとくとあじわえっ！」

馬鹿は、叫び、作り上げた光球を文夏とフェンルーツめがけて投げつけた。

「っ」

シーン……

鬼のような形相をしている麗華が、怖くて怖くて、フェンルーツに抱きつくようにして身を小さくしていた文夏は、特に何も起こった様子がないのを不思議がり、閉じていた目をそろそろと開いた。

「な、なんで」

文夏の視界に入ったのは、顔面蒼白になった麗華。

「こんなもんか？」

「なんで」

「何がや。まさかこんなちやちな攻撃が最強の攻撃とか言わへんよな。……視線一つで壊せる魔法なんてゴミもいいところやぞ」

「嘘よ嘘よっ！」

動揺する麗華の様子からして、先ほどの攻撃が彼女の最強の魔法だったのだろう。

しかし、それはフェンルートに視線一つで壊されてしまった。  
発動した魔法を無効にする方法は三つ。相殺するか、飲み込むか、  
壊すか。

相殺は、全く同じ魔法をぶつけること。

飲み込むとは、相対的な魔法でその魔法を塗りつぶすこと。

壊すとは、数十倍の魔力でもって力技で、魔法の存在をなかった  
ことにすること。

一番ありえない方法で魔法を壊された麗華は、自分の足元が崩れ  
て行くのを感じた。

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなん  
でなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなん  
でなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなん  
でなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでわ  
たしはえらばれたしゅじんこうなのになんでなんでわたしが  
つはずでしようなんでなんでこんなことになってるのそれと  
もいまからすてきなおうじさまがたすけてくれるのなんでな  
んなんでなんでなんでしゅじんこうがかたなきやおはなしは  
はっぴーえんどにならないじゃないなんでなんでなんでな  
んでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでな  
んでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでな  
んでなんでなんでなんでなんでなんでなんでツ！！！！

「全部お前のせいよっ！」

ぐらりと体を大きく揺らし、文夏に向かって駆けだす麗華の顔は  
もはや美しいとは形容できないものになっていた。  
その内面の醜さに負けて。

「っひ！」

首をすくめる文夏。

「近寄るんやないわ」

冷静なフェンルート。

「あゝあゝあゝあっ！」

悲鳴をあげる——壁に磔にされた麗華。

「あんなあ、仕掛けてきたんはそつちやろ。俺ら魔物はなーんもしてへん。やのに、勝手に侵入してきて攻撃しかけて、拳句お前のせいで、なんやねん」

自らの長く鋭い爪でもって麗華の肩を貫き、壁に磔にしたフェンルートが淡淡と語る。

「うるさいうるさいっ！ 魔物は殺されるべきだ！ 人間に滅ぼされる！ 魔王なんて死ねばいい！ さっさと死ね！ 誰にも祝福されない存在！ 呪われた存在！ 殺される！ 死ね！ 人間に存在すること詫びながら死ね！ わたしのために死ね！ 死ね死ね死ね死ね死ね！！ 魔王なんて死ねっ！」

冷静なフェンルートとは真逆に、暴れながら呪詛のような言葉を吐き出す麗華。

錯乱したようなその様子は、もはや尋常でない。

「お前の周りには何もない！ お前は誰にも愛されない！ お前

は殺されるべき存在だ！」

無様にはりつけられながらも、言葉を紡ぐ麗華。

「あ……、あ、あ……違う、ちがう」

明確な悪意を向けられた文夏はガタガタと震える。

文夏の口は自然と否定の言葉を紡ぐが、それと同時に脳内には麗華の言葉に同意する自分がいる。

確かにわたしの周りには誰もいない。

確かにわたしは愛されていない。

確かにわたしは……・世間一般では殺されべき存在、魔王だ。

「なんで魔王のお前がこんな綺麗な部屋で、綺麗な服を着て、傷一つ負うことなく生きているっ！？ さっさと死ね！！」

「違う、ちがう、ちが……」

麗華の剣幕に押されてか、力を失ったように床にぺたりと座りこむ文夏。

温室育ちの彼女の心は、見えざる刃が深く食い込み、血を流している。

「死ねっ！　魔王！」

そして、文夏は気を失った。

心が、頭が、これ以上麗華の言葉を聞くことを拒否した結果だった。

力を失った文夏の体が床に倒れ込む前に、文夏を受け止めたフェンルートは麗華を見つめ、優しく微笑む。

「お前が死ね」

冷たい言葉を吐きながら。

「え……？」

ゴフッと自分の口からあふれ出た大量の血液を見て、麗華が不思議そうな顔をする。

そのまま何気なく視線を下へずらした彼女は、自分の腹に空いた巨大な穴に気付く。

肉と骨がむき出しになった自分の体を見て、ぱかっと口を開けた彼女は、結局悲鳴を上げる事も叶わず——息絶えた。

「御苦労さま」

どさつと物みたいな音を立てて床にその身を投げた麗華をみてフェンルートが言う。

「しかし、お遊びみたいな魔法で一撃とは……雑魚だな」

鼻歌を歌いながら実に嬉しそうに、文夏をベッドへ運ぶフェンルート。

彼の心中がこんなにも幸せに満ちているのは、人生で初のことであった。

ずっとずっと欲しかったモノが手に入ったという幸せ。

フェンルートの満面の笑みだった。

全てはつつがなくフェンルートの手の上で行われた。

フェンルートの目的は、文夏ただ一人。

彼は大事に育てた文夏を、完全に手に入れるために今回の事件を企てた。

つまり、世界を閉じるために。

文夏が頼ってくれる。

文夏の世界には文夏とフェンルートしかない。  
重畳だ。

しかし、そこから世界を広げられては、世界から出られては困るのだ。彼女の唯一になりたいフェンルートとしては。

ではどうすればよいか。最強の魔物は考えた。

文夏が世界から出る気を無くせばいい。

外は怖いところだ。

外は悪意ばかりだ。

外は文夏にとって心安らげる場所ではないという意識を、芽生えさせれば良い。

そうして、フェンルートは今までちつとも成功していなかった人間の界越えの魔方陣に手を加え、作動するように調整した。

神子を利用するために。

神子とは魔王を殺そうとする生き物だ。人間がそう望んで召喚しているから。

神子の魔王を殺そうとする感情を利用して、文夏を怯えさせ、外に恐怖させる。

そして文夏に、自ら世界に蓋をしてもらう。  
自分で閉じた蓋は、他人に作られた蓋よりもよっぽど強固だ。開ける気が起きない。

フェンルートは目的のためならば文夏の感情さえも利用する。

間接的にフェンルートが召喚した神子は、馬鹿な生き物だった。  
周囲の人間に言われるがままに、見たこともない魔王を殺す気になるような、操りやすい存在。

勿論フェンルートも思う存分操らせて貰った。文夏を傷付けるために。

先ほど、麗華が文夏に思う存分罵詈雑言を吐いていたのは、フェンルートに操られていたからなのだ。

文夏を傷つける、ただそれだけの簡単な命令を肩に刺した爪から送り込む。

麗華は、思いつくだけの暴言を、悪意を、文夏に投げつけた。

結果、文夏は傷つき、世界を閉ざした。

あとは文夏が意識を取り戻した際に、甘く優しく接して、部屋を新しく作りなおして、目に見える守りを施して、外の世界は怖いところなのだと、フェンルートだけが文夏を守りとおせるのだと、フェンルートだけが文夏を必要としているのだと教え込むだけ。

悪意を”初めて”ぶつけられ、怯える文夏は安易にフェンルートを信じ、そして部屋に引きこもるだろう。

全ては魔物の思い通り。

二人きりの世界の出来上がり。

ハッピーエンド？

## 神子と独占（後編）（後書き）

策略家っぽいフェンルートを書きたかったはずなのですが…  
文章がめっちゃめっちゃすぎて伝わってないですよ…。すみません！  
次で最後です。

## 最初と××

全てのはじまりは遙か昔の魔物と姫の出会い。

おとぎ話として魔王国に伝わるアレである。

あれは契約の名残だ。

魔物が美しい人の形をとり続けお姫様に誠心誠意尽くす限り、魔物に愛され寂しさを埋める存在としてお姫様は、この森に居続ける、という契約をもとに作られたのである。

魔物はお姫様に一目ぼれしたが、魔物自身は醜い生き物だ。

お姫様が自分を受け入れてくれるわけがない。そうわかっていた。だから、”勝手に”契約を結んだ。

一方的で、独善的で、傲慢に、お姫様を騙すように成した契約。王という地位につけて、何もかもを誤魔化した。

だが、それが魔物という生き物。

愛しいと想う感情を持ちながらも、自らの欲求を満たそうとする性質は変わらない。

魔物は醜く、性格も悪い生き物だ。

けれど、寂しいという気持ちは人並みに持っていた。いや、人並み以上に持っていた。

だから欲した。寂しいを満たしてくれる者を。

おとぎ話に出てくる魔物は、当時最も強い魔物だった。

建国した後、自ら大公の地位につき、国を守って来た魔物は、自分のお姫様が亡くなると同時に、自らも死を選んだ。

しかし、そこで一方的に結んだ契約の代償を支払わなければならなくなった。

代償とは、永遠の寂しさである。

寂しいという思いだけを強め、記憶も体も失い、その場で別の魔物として生まれ変わる。

生まれたのは、寂しさを満たしてくれる者を求める、力だけしか持たない、ひどく寂しい魔物。

そしてその魔物は代代大公の称号を持ち、寂しさを埋めるためだけに奔走した。

二代目の大公のころに界越えの魔方陣が編み出され、それ以降ずっと魔王は召喚されてきた。寂しさのループから逃れられない魔物のために。

寂しさを埋めてくれる愛おしい存在、魔王を求めた魔物たちは時を経るごとに、様々な能力を習得していく。それらを今は”魔王様察知能力”という。

しかしその能力がある意味で仇となったのが、四代目の大公のころだ。

当時は大陸中が戦争に塗れていて、魔王国に入り込んで来た人間によって魔王が傷つけられたのだ。

魔王の感情を読み取る力を持つ魔物たちは、魔王の痛い、苦しいという感情を拾い上げ、人間に一斉攻撃を仕掛けたのだ。

種族的に圧倒的に人間に勝る魔物の攻撃は、人間をことごとく殺した。

その殺し方はすさまじく、人間の死体は塵にもならなかったという。

結果、戦争に明け暮れていた人間たちは、魔物という共通の敵を作ることで戦争を止め、魔物たちは魔王のツルの一声で自国に撤退

した。

以降人間は魔物を、魔王を目の敵にし、神子という存在を召喚するという方法を考え出した。自分たちでは魔物に敵わないと分かっているから。

これを不愉快に思ったのは勿論魔物たちだ。

魔王は戦いに秀でていない。愛され、守られるべき存在だからだ。にもかかわらず人間は魔王の死を望み、そう行動するようになった。……魔王を、危険にさらしてしまった。とんだ失態である。

そして魔物は、知恵をつけていく。

どうすれば魔王を守れるか。

どうすれば魔王を幸せにできるか。

どうすれば魔王を、自分たちのモノにし続けていられるか。

繰り返す死の中で、増していく寂しさを抱えることとなる大公は、他の魔物よりもずっとずっと知恵をつけた。

そして十五代目の大公、フェンルートは寂しさなんて言葉では表すことの出来ないほどの寂しさを埋めるため、育てられた知恵でもって、他の魔物に滅多に接触させず、文夏を独占することに成功した。

遙か昔に成された契約は、特別な魔力環境にあった森が作用し、今に至るまでずっと続いている。

いくつもの生物の活動を束縛するその契約は、もはや呪いといつていいほどだった。

文夏は何も知らない。

契約のことも、寂しさのことも、人間のことも、神子のことも、何も。

麗華にぶつけられた悪意に恐怖した、文夏の感情を読み取った魔物たちが、人間を血祭りにあげているということも、何も知らない。

彼女はただの引きこもりだから。

フェンルートは全てを知っている。

契約のことも、寂しさのことも、人間のことも、神子のことも、全て。

人間がほとんど息絶え、魔王国を一步出てみればそこらじゅうで死の香りがするということも、勿論知っている。

けれどフェンルートは文夏が手に入ったという事実以外は、もはやどうでもよかった。

彼はただの独占したがりだから。

- - 引きこもり魔王と独占したがり大公 - -

## 最初と××（後書き）

終わりました。

最後まで読んで下さってありがとうございました！

- - - -

不完全燃焼です…。

意味不明でごめんなさい。説明下手くそすぎてどうしていいのかわかりません。すみません。

以下解説もどきです。

寂しさと魔王に対する愛しさは、大公＞上位種＞中位種＞下位種の順に大きいです。

魔物は仲間意識をもっているので、寂しさの大きい者に多く魔王と触れ合わせてあげよう、って思っています。

寂しがりすぎるフェンルートに文夏を譲ってあげてる感じです。

下位種なんかは、文夏が存在だけで寂しさが埋まる、という感覚です。

愛の度合いも、そんな感じで、フェンルートは寂しさと相まって独占しなきゃやってらんねーよ！というヤンデレ？の域にいるかんじですが、下位種なんかは「魔王さま楽しそう！」ってだけで幸せになれる家族愛に近い愛です。

ちなみに、文夏は特別な子ではありません。

こつちの世界に魔方阵で呼び出された時点で、契約に組み込まれてしまって、『魔物に愛される』『魔物の寂しさを埋める』という力

を持ってしまっただけです。

魔方阵が呼びだそうとしているのは『大公の求めるタイプの人間』  
って感じです。

じつはこころはアバウトです。すみません。

フェンルートは、自分の魔王は気が弱めで怖がりな子がいいなって  
望んで召喚したので、文夏みたいな子が呼ばれたのです。

ちゃんとお話の中で説明したかったのですが、無理でした。  
至らない作者で申し訳ありません。

そしてここまでお付き合い下さいまして、本当にありがとうございます。  
ます。

小説好きが高じて、勢いで書いてしまいましたが、書き手の皆さま  
への尊敬の念が強まるばかりでした。  
書くって本当に難しいですね。

感想を下さった方、評価を下さった方、お気に入り登録をして  
下さった方、ありがとうございます！

また機会がありましたら、よろしくお願い致します。  
失礼いたします。

春川

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1740r/>

---

引きこもり魔王と××したがり大公

2011年3月11日08時45分発行